

二〇〇一年センター試験 漢文 問題解説

【書き下し】

唐臨、大理卿と為り、初めて職に廁み、一死囚を断ず。先時死に坐する者十余人、皆他官の断ずる所なり。会太宗、寺に幸し、親ら囚徒を録す。他官の断ずる所の死囚は、冤と称して已まず。臨の断ずる所の者は、黙して言ふこと無し。太宗、之を怪しみ、其の故を問ふ。囚対へて曰はく、「唐卿の臣を断ずるや、必ず枉濫無からん。意を絶つ所以なり」と。太宗、歎息すること之を久くして曰はく、「獄を為むること固より当に是くのごとくなるべし」と。囚、遂に原さる。即日、御史大夫に拜せらる。太宗親ら之が考詞を為りて曰はく、「形は死灰のごとく、心は鉄石のごとし」と。

初め、臨、殿中侍御史と為り、班を正す。大夫韋挺、責むるに朝列の肅ならざるを以てす。臨曰はく、「此れ将れ小事為り、以て意に介せず。請ふ後命を俟たん」と。翌日、挺、班を離れ江夏王道宗と語る。趨り進みて曰はく、「王、班を乱す」と。将に之を弾ぜんとす。道宗曰はく、「公卿大夫と語る」と。臨曰はく、「大夫も亦た班を乱せり」と。挺、色を失ひて退く。同列、悚動せざる莫し。

【現代語訳】

唐臨は大理寺（司法省）の長官となって、初めて裁判の職務に臨み、一人を死刑とする判決を下した。それまでに死刑とされた者は十余人いたが、皆他の裁判官が裁いたものであった。たまたま皇帝太宗が大理寺にでかけて、自分で裁判に間違いがないか再点検をした。他の裁判官が裁いた死刑囚は、冤罪だと訴えてやまなかったが、唐臨の裁いた者は黙って何も言わなかった。太宗が不思議に思つて理由を尋ねると、死刑囚は「唐長官が私を裁いたのだから、きつと間違いはないでしょう。それが抗弁をあきらめた理由です。」と答えた。太宗はしばらく歎息してから、「裁判というものは、本来かくあるべきである」と言った。その死刑囚はその結果赦された。即日、唐臨は御史大夫を拜命した。太宗は自分で唐臨の推薦文を作り、「形は火が消えた後の灰のように無心であり、心は鉄や石のように堅固である」と書いた。

初め、唐臨は殿中侍御史となって、儀式の席次を正す仕事をしていった。御史大夫の韋挺が、朝廷の儀式の列が整っていないと責めたところ、臨は、「そんなことは小さなことで、気にするようなことはありません。今度は別の命令をお願いします」と言った。翌日、韋挺が自分の席を離れて、江夏王の道宗と話をしていると、唐臨は走り寄つて、「江夏王は席次を乱しております」と言つて、弾劾しようとした。道宗が「大夫と話をしていたのだ」と言うと、唐臨は「大夫も席次を乱しております」と言った。韋挺は顔色を失つて退廷した。同席していた公卿や大夫たちは、皆、唐臨の厳格さを恐れて震えあがった。

【解説】

ここ数年漢文の力を見るというよりも国語力を見るような問題へと推移してきたのが、去年あたりから再び漢文らしい問題への揺り戻し傾向が見られる。

去年から登場した白文を読ませる設問が今年も登場(問二)、定番化しそうだ。当然従来の返り点付きの設問よりも難しく、漢文既習者と未習者の差がつきやすくなった。また、定番化しつつあった漢字の意味を二字熟語で選ぶ設問が今年は消えた。その結果、設問数は六問に戻って、一問あたりの配点が高くなった。それ以外は、文法力よりも読解力を試すといった基本姿勢は変わらないので、句形をやったぐらいでは歯が立たず、できるだけたくさん文章を読んで、漢文的な物言いに慣れていく方が有利といえよう。

問題文は、唐臨という人物の評伝の一部分であることはすぐわかる。この種の文章もすでにおなじみであるが、やはり唐臨の人となりをつかむことが最大のポイントとなる。前半は死刑囚の言葉を通して、裁判における唐臨の態度が語られ、後半は朝廷内での大夫との関係を通して、唐臨の性格の一端をかいま見ることができる。ふたつをつきあわせれば、「能吏」と呼ぶにふさわしい唐臨の姿が浮かんでこよう。なお、センター漢文では、繰り返し注意したように、(注)を丁寧に見てゆくことも大事である。

問一 やさしい。他の死刑囚が「冤と称して已ま」なかったのに、唐臨の裁いた死刑囚は何も言わなかったという記述と、直前の「唐卿の臣を断ずるや、必ず枉濫無からん」という言葉から、⑤以外には考えられない。

問二 白文を読ませる問題。当然まず句形等のキーをさがす。「固」はすべて「もとより」と読んでいるので、基準にならない。とすれば次は「当」が再読文字で、「当若是」は「まさにかくのごとくなるべし」であろうと見当がつく。②と④、それに⑥も一応候補に残す。後は「為」をどう処理するかを、前後の文意から考える。太宗が死刑囚の言葉を聞いて、嘆息して「固当若是(本来当然こうあるべきだ)」と述べたのであるから、④が一番ふさわしいであろう。「為」に「おさむ」という読みがあることは、講習でもおさらい済み。

問三 「鉄石」にたとえられることから、「堅い」態度であることはわかる。選択肢を見ると「公正・冷静・厳格・厳正・堅固」はどれもあてはまるので、上の説明部分から選ぶ。問題文前半部分のヤマは、唐臨が裁いた死刑囚だけが文句を言わなかったところにあり、太宗の評価のポイントは傍線部Bにつきる。したがって①が正解。ちなみに、無心であることをしばしば「槁木」や「死灰」に喩えることがある。

問四 二年ほど前から始めた、主語の組み合わせを問う問題。なぜか同じ主語の組み合わせが正解であることが多いのは、「まさか同じってことはないだろう」という心理でひっかけようということだろうか。まず傍線部Dは、位置からすれば韋挺か唐臨が主語。「王班を乱す」というセリフを考えれば、「班を正す」のが職務の唐臨であることは見当がつく。Eの「弾ず」は糾弾・弾劾の意。とすれば、これも唐臨の職務であろう。

問五 「色を失う」の「色」とは、顔色のことであった。韋挺が顔色を失ったのはなぜか。注の6・9・11を見れば、御史という官の職務がわかる。唐臨は道宗も韋挺も班を乱していると指摘したのである。①②④は事実と異なるので消える。⑤は「上司に指摘され」の部分が不適。よって③が正解。

問六 ポイントは、内容的には後半部分の方が前半部分より以前の話であるという点に気がつくかどうか。(注)に気をつけて読めば、前半は御史大夫(長官)になったときの話であり、後半は御史大夫の部下であった頃の話であることがわかる。後半部分の冒頭に「初め」とあるのも、ヒントとなる。①②④は、明らかに事実と異なる。残る③と⑤であるが、③は「彼の身を案じない者はなかった」の部分が疑問。⑤はというと、事実としてはすべて合っている。⑤を消す理由はない。